



玉川昌幸
コラム

変容

著者
玉川昌幸

玉川昌幸コラム

玉川昌幸コラム

大地

足

しっかり、二本足で立っていたつもりが
ぐらぐらと揺らいでくる。
自分が自分でなくなったような気がしてきたら
さて？
あなたならどうしますか？

若いときには、希望に満ち溢れていたのに
いつの間にか、白髪交じりの頭になったときに
夢までも色あせて変わってきたら
あなたならどうしますか？

あせってみても仕方はなく
自分で歩いてきた道なので
誰を責めるのでもなく
やはり、そうなってしまったのは
自分の責任なのだが
なぜだか、むなしい気持ちになってしまう。
そんな経験はありませんか？

頭で分かっているところも納得していない
そんなときには、旅に出かけてみると
いいかもしれません。

いいえ、決して逃避をしているわけではなく
もう一度じっくり、ゆっくりと
考える時間を持って欲しいのです。

旅に出れば自分の中のもやもやとした
感情がすこしずつほぐれてくるのが分かります。
場所を変えて非日常の世界に2、3日身を置いてみて
ください。

確実にエネルギーがチャージされてくるはずですよ。
いつの間にか胸をはって目を見開き
足はしっかりと地面を捉えています。
休養が人生には必要なのです。
そのあとに、またバリバリ目標が立てられます。

私たちの人生は失敗することもできる人生なのです。
失敗すればまた起き上がればいいのです。
でも、失敗ばかりが脳に刻みこまれても
その繰り返しになってしまいます。

成功をイメージしてください。
必ず旅に行った後には成功すると
イメージしてください。

私たちの人生には成功しか起きないと。

神

大昔から、神々を信仰することを
人々は伝統的に伝えてきた。
古くは天照皇大神から初まって
いろいろな神様が出てきている。

神社は御霊を入れて神様を奉るものであるが
時々、宮司が御霊を勝手に持ち出してしまう
不屈きなこころのひともある。

さぞかし、神様は嘆いていることだろ。
日本に限らず大昔から人々は事あることに
神を敬い奉ってきた。

雨乞いの儀式などはその代表的なものになると
思うのだが、なにかにすがりたいと言う
人間の拠り所として近年いろいろな神様が
存在している。

私自身、儀式を執り行うのを
見るのが好きである。

わたしが考える神様はいつもそのひとの
こころの中に住んでいて必要なときに
呼べば出てくる、存在だと思う。

小さいころお祭りで輪抜け様という神の
催しものがあった。
輪をくぐることで浄化されていくのだと言う。
小さいながらに神の存在が感じられた1日だった。
誰のこころのなかにも神様はいる。

その存在を自分のほうから感じられる習慣を
行うといつの日にか確実にコンタクトが
できると思う。

見守ってくれる存在は必ず側にいるし、
呼べば来てくれるので大いに敬い活用して
みてはいかがだろうか？

神様は尊べど盲信してはならない。

スピード

夢の実現のためにはスピードが必要になってくる。
あせって事をするとう損してしまうのであせらなくても良い
慌てないでここぞというときにはスピーディに事を
すすめるのだ。

そこにはタイミングを見定める日ごろからの地道な
訓練と努力の積み重ねが必要になってくる。
いざというときに必要なものを用意していないと
からげんきで終わってしまう。

昔からのことわざで火事場のばか力があるが
内に秘めた自分の力を瞬時に呼び起こすのは
思考回路のスピーディさである。
火事場で威力を2倍にも3倍にもしたかったら
日ごろから訓練と努力を少しずつしておかないと
いけない。

飛躍の時には天使が羽を貸してくれる。
あっという間に飛んでいくことができるので
スピードを持つことの素晴らしさを感じて欲しい。

こころの中

確認

物事を進めていく場合、必ず確認作業をしていく必要がある。

なんでもそうだが後になって間違いに気がついたときには確認作業をしている場合としていない場合には明らかな差がでてくる。

例えるならば、駐車場の場所の確認などである。大きなビルの中の駐車場などに車を止めた場合などは確認作業をして車から離れないと大変なことになってしまう。

つまりは、止めた場所が分からなくなることがあるからだ。

私の場合は特にそうだ。

記憶力はそんなに悪いほうではないが空間認知力がすこぶる点数がよくない。止めた場所が全く分からなくなるのだ。

探し回ってやっと自分の車にたどり着いたときには汗ダクダクになっている。

こんなことならば、止めなければ良かったと後悔してしまうことが度々ある。しかし、ひとの助言でその後悔はいつべんに吹き飛んでしまった。

止めた場所から離れる場合は後ろを振り返り振り返り離れていく方法だ。つまり確認作業をしながらことを進めて行くセオリーにのっとるわけだ。

こうすると周りの情景が目映り脳がそれを記憶する。

すると、不思議？なことに止めた位置がブレナイでわかるのでとてもいい。

私だけかも知れないがもし、似たような経験で困っている人は是非試して欲しい。

迷い

いつもと違う感覚が自分を襲ってきたとき人は心の中に迷いが生じてしまう。

確信に満ちた感情でところが覆われているときには全く無かった感覚である。

一瞬判断に躊躇するときにはなにかの理由があって迷いが出てしまう。どっちの道にいったいいのかわからなくなるときは判断基準が一時的に崩壊しているのだ。

そんなときには、深呼吸をしてスタートラインに戻ってみる方法が一番確実に迷いをなくせるのかも知れない。

また、迷うことで自分ひとりしか影響を受けない場合は、問題はないのだが他人を巻き込むようになるとそれは迷いではない。

迷惑と言う文字に変わってしまう。迷惑とは、自分以外のひとに及ぼす悪影響である。

自分だけで迷っているときはまだいいのだが自分の判断を待っている人がいるときには迷いは迷惑という言葉になってしまう。早く判断してもらいたいと誰もが思っているのだ。

何かの理由があって判断が鈍っているときには迷わないで誰かに下駄を預けるか、原点に戻ることが一番いい解決方法かも知れない。

顔見知り

この世の中には自分と似た人が3人はいるという。まだあったことはないが興味深い。顔は似ていても、考え方までは同じではないかもしれない。

しかし、引力の法則から考えると似た顔のところにはもしかしたら同じような考えの人が集まってくるのかもしれない。

周りに集まる人が似ると言うことは影響を受けて性格なども形成されていく

性格や顔や仕草までもが似てくると似たような人生を送っているのかもしれない。

そんな3人がもし、ばったり出会ってしまったならどんな感じになるのだろうか？
お互いの顔を見合わせた最初の印象は？

ドキッとすると同時に、なんで3人同時に
この時期に出会ってしまったのか？
考えるかもしれない。

シンクロが人生で常におきているとしたら
3人とも変容の時期であったかも知れない。
しかし、このときに3人が話し合っ
てお互いの人生を入れ替わる相談をしたら
いったいどのような結末を向かえるのだろうか？

ドラマみたいだが、仮定として考えると
おもしろい。
日常では、起こりうるはずのない人生を
急激に体験する場面に出くわすと
ひとはいったいどうなるのだろうか？

しかも、3人とも似たような性格であったのなら
入れ替わった先の人間は他人だと気がつくだろうか？

事実は小説より奇なりである。
あなたのまわりにも自分と似たひとは
いないだろうか？

メッセージ

過去

人間には、過去が必ずある。
過去のない人間なんていないのだ。
現在の自分がいるのも過去に存在した自分が
いたからこそ成り立つのだ。

人間の歴史にはひとそれぞれ幾通りもの
人生がある。
生まれる前の過去の自分の歴史をのぞいてみたときに
ある共通の想いが今の自分を作っている事がわかる。

そもそも、感情とはどこから生まれてきているのだろうか？
育った環境や、付き合う人々によって自分という
人間が形成される。

その中で自分を覆っている殻の最初の部分である
感情体は育ってくる。
そのうえには、精神体そして霊体の順番に覆われている。

感情とはある日突然に形成されるものではない。
生まれる前から自分の記憶の紐を手繰り寄せながら
ひっぱり形成されるのだ。

そのことを証明するには、自分自身で過去の記憶
までさかのぼることをしてもらうしかない。
わたしの場合は、外国で医者をしていた。

幸せに暮らしていたのだがある日当然に村全体が
洪水に襲われた。

急いで私は小高い丘まで登ったのだが
妻と娘を置いてきたことに後悔していた。

突然の洪水だったので村の下のほうへ行っていた
二人を待たずに丘まで登ってきたのだ。
洪水は容赦なく村全体を覆ってゆく。
私は、後悔していた……

今現在、後悔することの感情を形成しているのは
このときの記憶によるものが多い気がする。

後悔に種類なんてあるの？
疑問に思っているかも知れないが必ず
今も後悔したと思った瞬間水の音が聞こえてくる。

わたしだけの体験なのでみんなが同じとは言わないが
後悔の感情であることには間違いはないようだ。
自分の中の公開の感情の元が知りたいと思ったら
過去を旅してくるのもひとつかも知れない。

以心伝心

朝から胸のドキドキが止まらない時がある。
そんなときには決まってある人からの
メッセージが来ていることが多い。
心配事が多くなってくると私のところに
飛んでくる。

距離が離れていても関係はないようだ。
逆にこっちがその人のことを想うと
唇がしびれてくるらしい。

からだの反応する場所こそ違おうが明らかに
想いが伝線してきている。

ドキドキした瞬間に、その人からメールが
来ることも多い。
また、唇がしびれ始めたときにこっちからの
メールが届くことが頻繁にあると言う。

この現象を科学の力で証明できるのだろうか？
否、絶対無理である。
証拠になるものが何一つないのだから
証明はできない。

ただし、事実として二人の間に頻繁に
起きるこの現象をどう捉えればいいのか？
近くなれば近くなるほど頻繁に起きてくる。
まるで、電話ベルのように・・・

存在を自分の想いを届けるのはもしかしたら
この方法がもっとも確実に確かなのかもしれない。
以心伝心とはたぶん、ここからきたのだろうと思う。

足音

人生の岐路に差し掛かったときには、どこからともなく
足音が聞こえてくる。
いい悪いに関わらず、足音だけが大きく響いてくるのだ。
意味もなく近づいてくるわけではない。

その人にとって必要なメッセージを伝えにくることだってあるのだ。

メッセージを受け取る受け取らないは本人の自由である。

受け取らなかったとってその後の人生が大きく様変わり
するのかというとそうでもない場合が多い。
むしろ受け取らなかったほうが平々凡々とした
人生を送れる確率が高い気がする。

では、受け取ったほうはどうなったのかというと・・・
破天荒な人生にその後なるのか・・・
聖人君子みたいに大きく人格まで変わってしまうのか・・・

その人になってみないとわからない。
ただ、言えることはメッセージを受け取ったほうが
はるかに受け取らない人に比べてドラマチックな
人生を送ることができるということだ。

先のことは誰にもわからない。
神様だけが知っている。

メッセージを受け取る時期や意味はいろいろな
ケースが考えられるが、一つ言えることは
積極的に受け取ることで大いなる変容が
訪れることになる。
という事実だけは忘れないで頂きたい。

人はチャンスをいつも思い描き、またそのチャンスが
手を差し出してきたのなら、遠慮なく受け取ったほうが
足音に対して礼をつくすことになるのだ。

自らが変わろうとするタイミングと勇気を逸しなれば
その先には輝かしい未来が待っていることだろう。

人生を考える

人生の目的

この世に生まれてきた意味を求めて
ひとは日々生きているのだろうか？
毎日を、会社と家の往復をするために
生まれてきたのではないことは確かだ。

その単純な往復の毎日の中から学びを掴み取る
ことはできるが、生まれてきた意味はどうだろう？

ひとは、目的を失った状態で日々生きていけるほど
強くはないと想う。

そんなことを考えるのは無意味だと思うかも
知れないが生きがいをテーマにして考えた場合
やはり単調な生活の繰り返しでは見出せない気がする。

目的と生きがいは自分支える両輪だと思う。
どちらがかけてもうまく走らないしまっすぐ
前にはすすまない。
自分という人間が生まれてきた以上走り続けていく
ためには走るための道具が必要である。

ガソリンは日々の食事や睡眠にあたるが
アクセルやハンドルは目的や生きがいにあたる気がする。
また、ブレーキなどは成熟した魂の判断能力を
磨くことで効きが増してくる。

まだ他にも車に例えるならばいろいろなパーツが
あるのだが、要はどのパーツが欠けても
車は走らないし、また走ったとしても目的地までは
たどり着かない。

そのパーツの中で自律神経をも司っている部分が
目的や生きがいなのだ。
つまり交感神経に当たる部分であるが、積極的に
脳を動かすことでこころや体の健康までも
維持することができる。

やはり健康でなければやりたいこともできないし
また単純な会社と家の往復さえもできなくなる。

人生の目的とは、自分らしくあるため
よりよく生きるためには必ず設定しておく必要が
あるテーマのような気がする。

自分ではどうすることのできない問題に直面したときに
ひとは誰かに相談をしたくなる。
どんなに偉い人でも、心の内を吐露したくて誰かに
打ち明ける。

聞いてくれるだけでいい。
別に答えを求めているわけではない。
話すことで心のもやもやが晴れて気が楽になってくるのだ。

だが、話すことで自分のところにあったわだかまりは
取れて消えるかもしれないが
新たに別の問題が浮上してくることもある。

話すことでどうすることのできない問題に再度
直面してしまうことだ。
つまり、現実的な解決の方法を考えなくては
ならなくなるのだ。

どうすることもできない状態からなんとか
抜け出る方法を建設的に考えるのだ。
問題の再認識を話すことで確認してしまうことだって
あるわけだ。

これでは、もやもやが晴れるどころか益々
霧がかかってくるかもしれない。
だが、問題が再浮上したときこそ建設的な解決方法とは別に
神様にお願いをしてみるという方法もある。

つまり、天に委ねてあるがままを受け入れることで
問題が自然と解決しているかもしれないのだ。
そもそも、どうすることもできない問題が起きた
場合の大半は自分が関わっている。

自分が原因を作り出しているわけだから、
自分自身のところにストレスを与えているのも自分だ。

ストレス解消のために人に話すのも
問題が再浮上したときに考えるのも
元はと言えば自分が発端である。

楽になる、楽にならないのは結果であって
どうしても答えを探す必要はない気がする。
忘れてしまうと言う意味ではないが・・・
ここは、天使か神様に預けて見てはどうだろうか？
一番ところが軽くなっているかも知れない。

決断

ひとが決断をするときとはどんなときだろう？

決断が早い人、じっくり考える人
タイプ別に分けると大きくこの2種類に
分類される。

決断を下すころの状態にも個人差がある。
決定をするそのギリギリまで待って
右か左かの価値があるほうに
最後の審判を乗せる。

または、初めに大まかな決定を自分の
なかでしておいてかけひきをしながら
大洲目になって右か左かの審判をする。

あなたはどちらのタイプであろうか？
わたしには、このどちらでもない
出たとこ勝負の感覚派というところであろうか？

初めでもなく、ギリギリまで待つでもなく
自分の直感を信じて細かく感覚のヒダを
切り刻みながらその場その場で決断を
下して積み重ねた統計を重視しながらも
最後の決断は自分自身の直感に従うタイプだ。

決断を一度した以上、自分自身のところが下した
ものであるので、ある程度はそれに従ってゆく。
ただし、決断を下す対象が恋愛における場合は
いろいろなところの変化が顔を覗かせてくるので
一概には言えない部分もある。

自分のなかでどれだけその恋愛が本気なものであるのか
否かで大きく変わってくる。
真剣になればなるほど、思い通りに行かない
こともあるだろう。

でも、人生の中で学ぶべき事柄の一つである
恋や愛を体験できるのだから幸せなときを
過ごしているとも言える。

決断とは、そのひとの本気度合いが最後には
決め手になる気がする。

時のなかで

待つ

誰でも一度は誰かを待った経験がある。

男性でも女性でも誰かと約束をして

待ち合わせなどをする。

しかし、時間になっても相手がこない場合は

当然、待ちくたびれることになる。

待っている間、ひとは何を考えているのだろうか？

もちろん、答えの第一位は相手のこと。

と答えるだろう。

だが、ひとによってはこの待っている時間

あることをふと考えてしまう人がある。

それは、人間観察である。

普段は自分のことで精一杯なので自分以外の

ひとをじっくりと見ていなかった人が多い。

この待っている時間はちょうどいい観察の時間だ。

誤解のないように言うが、あくまでもひとを

見る、ただそれだけのことである。

ひとの、性格や本質は日常や歩いているときの

動作に現れる場合が多い。

与えられた環境や、自律神経の働き具合にも

関係はしてくるが、大体の場合、性格や本質が

現れてくる。

じっと見ると失礼にあたるのでさりげなく見るのだが

自分のことに当てはめて考えると絶対にできない動きを

するひともある。

待っている人に手当たり次第声を掛ける人だ。

何かの目的があって声を掛けているかもしれないが

純粹に待っていて誰かが約束の時間にこなくて

いても経ってもいられなくなって人に声をかけている人

がわたしには不思議で仕方がないのだ。

やはり、待っている時間は自分のところを観察する時間に

してみるとところの動きがよくわかる。

人間観察である程度、見た後は、自分が待っていて

相手のことを考えると同時に自分自身のところと

向き合う時間に見てみたらいかがだろうか？

そうしてみると、相手と自分の距離が不思議と

わかる。

待っている時間は、貴重な時間である。

普段できない、人間観察や自分のところと向き合う時間に
してみるのはどうだろう。

距離

心の距離は物理的に離れば離れるほど
近くなってゆく気がする。
しかし、ひとつだけ条件がある。
それは、お互いに相手のことを深く思っている
ことだ。

どうでもいいひとなら、物理的に離れば
離れると心の距離も正比例して離れてゆく。

しかし、条件付きながら反比例するとき
ひとは、いとおしい感情が沸々と湧いてくる。
と、同時に心の距離はグッと近づいてくるのだ。
片一方だけ相手のことを想っている場合は
少し微妙だ。

想いの光線が時々素通りしてしまうからだ。
相手の人にうまく当たってくればいいのだが
振り向いてくれるまで幾度となく狙いを
定めて打つことを繰り返さねばならない。

まさに自分の気持ちとの我慢比べだ。
必ず、相手の心に当てると本気で想っているうちは
まだいいのだが、我慢が限界に来たときには
気持ちが離れてしまうため、相手の心に
なかなか当たらなくなる。

そうなってくると、元々近くなかったところの距離は
気が遠くなるほど離れてゆく。

また、日常で繋がっているひと同士が
心の距離が近いとは限らない。
非日常と日常の繰り返しを互いに経験してもなおかつ
いとおしい感覚がこころに残っているのなら
確かめてみるべきだ。

日常で繋がっているとは毎日同じ時間を過ごす
共有した空間を分かち合っているだけでほんとうの
ところは錯覚なのかもしれない。

繋がっていた相手といつのまにか心の距離が遠くなっていたなんてことはよくある話だ。日常で繋がっているひとは過去に関係のあった人が多く、シンクロしている。

ただ、シンクロしていても、宿題が終われば離れていく場合も多い。

生まれてきた宿命の謎を解き明かすことに真実はあるのだ。

心の距離とは、生まれてきた宿命を自分で解くための判断基準かも知れない。

永遠

永遠のことを考えると月を考えてしまう。

昨日も空を見上げているときれいなお月様が出ていた。

大昔からはるか彼方からわたしたちを見下ろし優しく見守っていたお月様。

この先も、わたしが地上からいなくなっても引き続き地球を見ているだろう。

わたしたちは、いろいろな感情に縛られてこの世の中で生きている。

その感情をお月様に委ねることができるのならここが解放されて、よりよく生きることができる。

とらわれ過ぎると生きていくことが辛くなる。

ちっぽけな感情にこころを囚われていると自分の生まれ持った能力を自らの手で摘んでしまう。

わたしたちの力は初めからあるのに永遠の存在を信じまいと否定すると力が出てこない。

空を見上げれば、新月以外の時にはお月様は肉眼で確認できる。

そこにあるのだ。

わたしが産まれるずっと前からまたこの先もずっと。

永遠を信じるなら永遠の方から不思議な力と幸せを与えてくれる気がする。

真実の扉

隠し扉

忍者屋敷に行ったときに、からくりの扉を見た。
畳を裏返すと逃げ道になっていたり、扉を
開けても開けてもまた扉だったり・・・

昔の人は身を守る術を知恵とユーモアを持って
必死に考えて実行にうつしていた。
現代に生きる私たちも隠し扉を確実に
ひとつ持っている。

それは、宿命のことである。

宿命とは眼には見えないが、確実に存在する。
眼に見えないものをどうやって確認するのかは
これから書くことを実行してもらおうと
分かるかもしれない。

たまたま、出会ったひとと（あまり興味がないひと）
深くまで話し込んでみることだ。
興味がないにも関わらず深く話こんでいくと
自分に関連のあるキーワードが次々と飛び出してくる
はずだ。

そのキーワードをメモしておいて一番気になる
言葉を8つ並べていく。
それから2つずつ並べて2つのなかから導き出される
形容詞を4つ書く。

その次には4つの中から2つに絞る。
最後に1つに絞って出てきた答えを見て欲しい。
きっと驚くはずだ。

隠し扉がひとりひとり何枚も人生には用意されている。
その扉を開く鍵は実は自分自身が持っていることに
気がついてみると面白くなってくる。

真実

人が真実を口にするときとはいったいどんな
状況のときだろうか？
うそがばれて堪忍したとき？
正義のこころが芽生えたとき？

いろいろな理由が考えられる。
一番は真正面からそのひとや事柄と向き

合いたいときに他ならない。

どうしても伝えておきたい本当のことを
まっすぐに言う価値のあるときには
躊躇しない。

価値のない場合でもいってしまうときもあるが
本当に伝えなければタイミングが重要になってくる。

それは、何かを教えることにも合い通じることがある。
真剣に真正面から向き合わないと本当の
意味での教えたことにはならない。
相手の心に届かないのだ。

相手の心の琴線に触れるには体裁は必要ない。
どっちが反っているのか分からないくらい
ところをぶつければ奥のほうまで届く。

真実とはそこまで行かないと手に入れることは
難しい気がする。
しかし、現実的には事実の積み重ねでも
真実の推測はできる。

ところを押し量るときには事実をひとつひとつ
見てゆくことも真実の探求に一役買うであろう。

言葉

言葉はやはり発してこそ効力がある。

昔から言わなくても伝わっているから・・・

といったような以心伝心という熟語があるが
やはり声に出して相手に伝えないと細かな
ところまでは伝わっていかない。

伝えないほうが良いと言った場合もちろん
あるが、相手のこころの動きを感じ取りながら
言葉を選んでいく作業をすればいいのではないだろうか？

言葉をかけるタイミングはそれぞれである。

また相槌は言葉と言葉をつなぐ潤滑油にもなっている。
上手に相槌を打っていくことは相手の真意を聞くことが
できる効果的な手法だ。

ひとは自分の話を本当に相手が聞いているのかどうか
不安に思いながら会話をしている。

一方的にまくし立ててスッキリして終わるひとも中にはいるが、大半の人はコミュニケーションをとる手段として相手との言葉のキャッチボールに重点を置く。

なぜなら、取り残されていく感覚が辛く感じるからである。

自分という存在を認めてもらう唯一の手段として会話をすることの大切さを小さなときから学んでいる。

大昔はテレパシーでコミュニケーションしていたらしいが相手の目を見ながら会話を楽しむほうがやはりいい。

自分という存在を認めてくれることも会って話すという理由のひとつだが、それよりも相手の魂に触れたい欲求が人間にはあるのではないだろうか？

ころところの繋がりが希薄になってしまえば感情のない人間になってしまう。

情がそこには存在しない。

情だけでは生きていけないが情がなくなってしまっただけでは人間としての魅力が色あせてくる。

言葉とは人間の情を高め魂に触れることができる最終手段のような気がしてならない。

生きる実感

操り人形

人の一生は果たして操り人形なのだろうか？

人間として生まれてきても人によっては誰かの操り人形として一生を終わる人がある。

いい悪いに関わらず、その人の気持ちは心地いいのだろうか？

気持ちの上で操られているのが楽だからほっといてくれ！
といわれると何も言えない。

しかし、考えて欲しい。
依存の心がそこには生まれていることを。

もしも操られている糸がプツンと音を立てて切れたときのことを考えてみて欲しい。

自分自身で糸を操作してハンドリングできるのだろうか？
それとも他の誰かに操作を変えてまた操られる人生を送るのだろうか？

いずれにしても繰り返しの中で危険な遊戯をしているにすぎない。

怖いのは自分で決断する場面において感情のコントロールが効かなくなったときの事である。

まわりに迷惑をかけることもそうだし、自分が自分でなくなってしまう。

操られている自分が本当の自分か、それとも糸が切れて空中に漂っている自分が本当の自分か？

いずれにしても、ブレーキはいざとなったとき効くかどうかはわからない。

過去のトラウマとしてコンプレックスがあった場合その呪縛から抜け出れない以上、一生操り人形になってしまう。

私たちの人生は失敗することも許される人生だ。
また立ち直ればいいのだが、教訓として知恵を持って欲しい。

繰り返しの中で漂っている以上は成長はできていないことを。

もがき苦しんでも別にかまわない。
もがき、もがき、もがききつた後には必ず何かがある。

掴める。

掴んだら今度は離さない事だ。
宿命としての自分の生まれた答えが見つかると思う。

操り人形の伸びた糸の先には自分の手があることを
忘れないで欲しい。

時計

時計の音には色々な音がある。

それは、単なる音色だけではない。
音色に隠された時を刻むメロディがそこには内在する。

メロディの中には歌が入っている。

昔のチクタクという時計の音を目をつぶって聞いてみると
時間のトンネルの中に入ってタイムトラベルをしている
錯覚に陥ることがある。

自分がさびしいときや悲しいとき立ち直れないときには
時計の前で目をつぶって聞いてみて欲しい。

自分の心が今どういう状態にあって、それを解決する術
が見つからないとき時計の音は教えてくれる。

限りある時間だから無意味なときは過ごしたくない。
24時間誰でも平等にある時間。

時計の音が教えてくれるのは有意義なときを過ごさないと
もう時間があまりないんだよ、という現実がある。

一歩一歩歩いてきてふと立ち止まり人生に悩む瞬間
それを解決してくれるのは以外にも時計の音で
ある場合も多い。

無機質なものだけに集中しているといろいろな考えが
浮かんでは消えてゆく。

そのうちにはたと気がつき悩みが解消されたときは
ないだろうか？

相談相手にはならないかもしれないが立ち直るきっかけに
なるツールの一つであると思う。

あまりに溢れかえってその存在の価値が希薄になってきて
はいるが、人間の生活に密着している時計の音に
時々立ち止まって耳を澄ませてみるのもおつな気がする。

やすらぎ

ひとがやすらぎを感じる時とはどんなときだろうか？

人それぞれ違うのでわたしのやすらぎを書こう。

わたしの場合は価値観のあっているひとと話をしている時である。

人生において限りある肉体の命のうちにできることはそう何個もない。

自分が遣り残したと後悔しないうちにひとつひとつクリアにしていかないとあっという間に年をとってしまう。

人間関係においても出会う人の数は限られている。

限られたひとと会っていてまったく意見が合わない場合それを自分の修行とみて苦手意識克服のための出会いだと考えれば納得はできる。

しかし、苦手な人が限りのある人生の大半を占めたい場合年をとって振り返ると後悔の念が出てくるのは否めないだろう。

やはり人間は欲望を持って生きている。

実りある人生にしたいと誰もが願っているだろう。

価値観の同じ人とできるだけ多くの時間を費やすことは自分が生きているという実感を感じる至福のときだ。

安らぎとはその瞬間生まれてくる気がする。

じっくりと腰をおろして

日常

一生懸命に生きている人は考えない題材のひとつに日常がある。

ただ、日常といっても分かりにくい。
非日常と日常について考えてみた。

普段私たちが生活している空間は日常となる。
朝起きてから夜寝るまである一定のルーティンを
繰り返しながら過ぎていく時間が日常だ。

それに比べて非日常は、現実の実感を感じさせない
空間に身を置くことになる。

旅などがそれに当たるが非日常には日常にはない
開放感とスリルが潜んでいる。

生活感がないことが非日常の暗黙のルールとなるのだが
ときどき日常に帰ってこれない精神状態になることもある。

そんなときの心の中は、現実逃避なのだろうか？
否、日常でできなかった自分自身の役割を果たすための時間を
使うことが実りを持って日常に帰れるのだ。

日常と非日常は表裏一体である。

どちらかがかけても狂いが生じてくる。
バランスを保ちながらそのなかでどちらも楽しむ
余裕が生きる糧となる。

絶妙のバランス感覚を磨くことがこころに張り潤いをも
たらしてくれる。

日常と非日常この表裏一体の感覚とうまく付き合っ
て行きたいものだ。

場所

場所のエネルギーはとても重要である。
大地のエネルギーとも繋がっているので
強力なパワーがある。

時々、場所のエネルギーの力を借りて治療をすることが
ある。

東西南北のドアの前に行き力が安定するまでじっと待つ。

何かを掴んで光を浴びている感覚だろうか？

方位の力をもらったら次の場所へ移動してゆく。

4方向のグランディングが終わったらもう一周してくる。

不思議だけれど、この場所を利用した治療はかなりの成果が上がっている。

地球上にまだ人間が住んでいなかった時代から大地は昆虫や微生物や水などをその大きな身体で受け止めていた。

広大な宇宙を除けば地球の大地が一番古くから歴史を刻んでいたのだ。

大きな隕石による衝突もなく無事に今日まであることは大地の力が強大だと言える。

母なる地球の大地にわたしたち人間は守られて生きているのだから、場所のエネルギーを活用することはとても重要な意味を持つ。

思考のなかでただグランディングしているだけでも想いとして地球のなかに届けられる。

子供のような私たち人間の願いを聞き入れるのは地球の大地にとってはさほど難しいことではない気がする。

大地を知り、大地を守ることが人間が永遠にこの地球で生きていく術である。

大地に感謝。

人の一生

生まれれてきた命、死んでいく命

それぞれの命のハザマで私たちは生きている。

命の長さは人それぞれだが生きてきた足跡は

そのひとの想いの数だけつけられていくような気がする。

どんな足跡を残してゆくかは初めから決められて

いる気もするのだが、ハプニングのハプニングまでは

わからないような気がする。

軌道修正をしようとしているときに思わぬハプニングが

降りかかってきたときにはどう対処していいのか
分からない場合がでてくる。

判断能力はそのひと独自の意識コントロール下にあるので
どのように決定を下したかでそのひとの本質が
見えることが多い。

人の一生はその人の魂を磨きながら本質を向上させていく
繰り返しの連続かも知れない。

命の尊さを感じながら魂の学びを見つめながらひとは
成長してゆく。

小さな幸せをかみ締めているとやがて大きな幸せがやってくる
ことがわかる。

それと同じように、常に感謝、感激する人生を日ごろからの
習慣にすると一生は幸福感で包まれるのではないだろうか？

運命のなぞ

できる

肉体と精神の融合ができたとき初めてことを成し遂げられる。

そのことは、自分だけではなくひととの協力関係においても当てはめることができる。

自分は無理だとあきらめていたことは突き詰めれば根拠のないことが多い。

無理という感情は自分が無理やり作りだした意識の産物である。不可能なことなど何もない、奇跡が当たり前だと仮定するとできないことはなにひとつないことに気がつく。

そのスピードが速いか遅いかは個人差が当然あるが心の奥で決定された事項を頭が勝手に認識をしてマイナスの方向に行っていることがどれだけ多いことか。

結果としてできなかったことはフィードバックされて同じ状態のとき自分にはできなかったんじゃないかという負の感情が生まれる。

このことにしてもできない経験から導き出されたものであるが元を正せばその経験も自分自身の心の中で道程をつくってきたのにすぎない。

必ずできるという疑似体験を頭の中に常に埋め込んでいくとできない理由が打ち消されていく。

どんな状況になってもあきらめずにできると心に植えていくとそれは、習慣になる。

もともと何でも可能思考体でひとは生まれてきたのだから上手にコントロールして人生をいきていかないと損である

。

運命のいたずら

運命を初めからわかっていてひとは生まれてくるのだろうか？

時々考えてしまう。

最初から決められたレールの上を歩くように設定されてこの世に出てくるとしたらハプニングをどう理解すればいいのだろうか？

ひとは、思わぬハプニングに弱い存在である。

稀に強い人もいるが大多数は不意を疲れた攻撃に戸惑いを見せるだろう。

そんな時、このハプニングも最初から仕組まれているびっくり箱だとしたら本来は驚かなくてもいいものかも知れない。

だが、対処の仕方を間違えたばかりに大きくそこから先の運命が狂ってしまうこともある。

これも、初めからわかっていたこと？
いつも考えてしまう。

しかし、それは仕組まれていたことではなく運命のいたずらだと感じる。

決められたレールを歩くように設定はしたものの途中で針路変更をしたのではないだろうか？

理由はいたって簡単である。

人生の真の目的を自分自身により良い形で経験させるためにいたずらを仕掛けたのである。

完璧なシナリオは初めから期待をしていないと感じる。

書き直しもできる運命がわたしたちには与えられているのだ。

数字

気になる数字が頭の中から離れないときは数字の持つ意味を考えてみるのもおもしろい。

過去世で記憶のアカシックレコードに刻みこまれているひとは、今現在その数字を見ると無意識のうちに行動や思考に反映されているらしい。

嫌いな物、好きなもの、気になる数字とはかつて密接に繋がっていたと思う。

その数字を見ると心の奥のほうで沸々と沸きあがる言いようのない感情を覚えてしまう。

デジャブの感覚と似ているといったほうがいいだろうか？

頭で考えても理解できないことは多い。

しかし現象を含むすべての思考には必ず原因となるものが存在する。

原因を探求しても、分からないときにはどうしたらいいのだろうか？

少しだけ危険だがこころも身体も預けてみることで掴みとることができる。

治療の場合も同じである。

治療するものが精神を集中して直してあげたいと想っても受ける側にその気がない状態の時には治療にはならない。

受け取るという意識の集中をしてもらう必要がそこには出てくる。

デジャブ的な数字が頻繁に出てきているときには是非この受け取るという意識で委ねてみると意味が理解できるかも知れない。

成長の過程

確実なもの

人生において自分から離れていかないものとは
一体なんだろう？

長い人生の中でこころの支えになるものがなくなった
ときには、ふと考えてしまう。

確実なものがないと仮定するとさびしくなってしまうので
あると仮定すると今現在ない状況の人は手探りで探して
いなくてはならない。

見つければこころの支えとなって生きる希望にもなる。

しかし、ほんとうに確実なものがこの世に存在する
のだろうか？

形あるものはいつかは必ず壊れてしまうし、人間の心臓の
鼓動が止まれば、そのひとはこの世から去ってしまう。

一体、確実なものはあるのだろうか？

確実という熟語が存在するのだから何か必ず
あるのだと思う。

普遍的に変わらないものを考えてみたら一つだけあった。

それは、変容を受け入れる自分自身のこころだ。

自分が変わるために、或いは成長するために
いままでの古い殻を脱ぎ捨てて新しく生まれ変わる
気持ちは自分を奮い立たせ心の中に強さを
生ませる。

その変容を無条件に受け入れることはずっと変わることの無い
確実なものといえるだろう。

変容は、誰の心にも生じる化学変化である。
自分に対してなのではたからはそのスピードや
かたちは目に見えて分からないのかも知れない。

ただし、変容後は確実に成長を遂げている自分がそこには
存在するだろう。

魂の成長

ひととして生まれてきたからには、魂の成長は必要だと感じる。

ただ、現世を淡々と平々凡々に生きていってもいいのだがそこには、魂の修業があるように思う。

日常で感じたことを1日1日を大切に振り返りながら自らの成長を楽しむゆとりを持ちたいものだ。

ひととひととの交わりの中で魂は磨かれていく。

それが、どんなに最悪な出会いであっても魂にとっては出会うべくしてであった関係なのだ。

そう、生まれる前からそれは、仕組まれていたように思う。

なので、あながち生年月日から導き出される数々の占いも当たっていないとは言い切れない。

設計図を綿密に書いてからこの世に生まれてきたはずだ。

しかし、同時に忘却のプログラムもその中には入っている。思い出すように、努力を覚える訓練も組み込まれているのだ。

魂の成長を考えるのなら泣き虫になっては、いけない。泣いてもいいが、常に前向きな姿勢をとり続けることだ。

キッと前を見続ける負けん気があればいくらでも魂は喜んで成長していけると思う。

メッセージ

今まで生きてきて、メッセージというものに幾度となく遭遇してきた。

ひとりのわたしという人間でさえかなりの数メッセージを受け取ってきたので地球上の人間のメッセージをあわせると膨大な数字になるであろう。

小学生のときには、夢という形で受け取っていた。正夢ほどリアルでないにしても前触れと思われる映像はよく見ている。

心の中の様子を映していたものもあった。

夢は、そのときの自分自身の心理状態を映す鏡でもある。

体調が悪いときにはよく体調が悪い部分の夢を見る。
と、同時に誰かからの声とも取れた。

無視して遊びまわっていると必ずその夜は同じ夢を見る。

自分への警告であったと今思えばそんな感じがする。

大人になっても、幾度となくメッセージは受け取ってきた。
形を変えて夢というものではなくなった。

ひとを通じて自分へメッセージを発信していると
直感で感じ取るようになった。

対人関係では、誰もがそのようなことを経験するのでは
ないだろうか？

むかしのひとがよく言う「人のふり見てわがふり直せ」
のそれに当たると思う。

人は自分の鏡となってメッセージを届けてくる。

生きていく上でこれだけ確かに良心的なメッセージは
ないと感じる。

社会のなかでひとと交わって生きることには自分への
メッセージがたくさん入っているのだ。

見逃さずに生きていけたらといまさらながら
そう思う今日このごろである。

玉川昌幸コラム

<http://p.booklog.jp/book/88428>

著者：玉川昌幸

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/komanech/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88428>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88428>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ